

3.1.2 両生・爬虫類

■確認された両生・爬虫類の概要

・生息環境と種構成

現地調査により、6つの調査エリアで両生類が2目6科12種、爬虫類2目7科11種、合計4目13科23種の両生・爬虫類が確認された（外来種2種を含む）。確認された両生・爬虫類のリストを表14に示す。

調査エリアには落葉広葉樹林やスギやヒノキの植林等の森林環境、河川敷や非耕作地等の草地、水田や畑等の農地環境、河川や水路、池、堀等の水辺環境、人家や商業施設等の人工建造物の多い市街地等多様な環境が含まれ、各環境に生息する多様な両生・爬虫類が確認された。確認された両生・爬虫類の主な環境を表15に示す。

森林では、ニホンヒキガエル、タゴガエル、ヤマアカガエル、モリアオガエル、ニホントカゲ、ヒバカリ、ニホンマムシが確認された。ニホンヒキガエル、ニホントカゲ、ヒバカリ、ニホンマムシは落葉広葉樹林の林床に生息していた。タゴガエルは森林内の小川やその周辺の林床に生息していた。モリアオガエルは森林内の池で繁殖が確認された。

草地・農地では、ニホンアマガエル、ニホンアカガエル、トノサマガエル、ヌマガエル、シュレーゲルアオガエル、ニホンカナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシが確認された。ニホンアカガエル、トノサマガエル、ヌマガエル、シュレーゲルアオガエルは水田等で繁殖していた。ニホンカナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシは草地や畑地に生息していた。ニホンアマガエルは水田で繁殖し、周辺で広く確認された。

水辺では、アカハライモリ、ツチガエル、ニホンイシガメ、クサガメ、ウシガエル（外来種）、ミシシippアカミミガメ（外来種）が確認された。アカハライモリ、ツチガエルはビオトープ池に生息していた。ニホンイシガメ、クサガメ、ウシガエル、ミシシippアカミミガメは大きな池や流れが緩やかな河川の淵等に生息していた。

市街地では、ニホンヤモリが確認された。民家や倉庫などの人工建造物に生息していた。

森林環境や草地・農地環境で確認された両生類は繁殖期になると水田、ため池、河川などの水域に移動し産卵する。水域とこれらの環境の連続性が両生類の繁殖に必要となっている。爬虫類は複数の環境を利用しており、多様な環境が連続的に成立することで奈良市内における爬虫類の種の多様性を高めていると考えられる。

表 14 エリア調査で確認された両生・爬虫類リスト

目	科	種	学名	確認時期					確認エリア					
				早春 季	春季	夏季	秋季	冬季	奈良 公園	佐紀	矢田 丘陵	大柳生	都介野	西ノ京
有尾目	イモリ科	アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i>		●	●	●					●	●	
無尾目	ヒキガエル科	ニホンヒキガエル	<i>Bufo japonicus japonicus</i>		●								●	
	アマガエル科	ニホンアマガエル	<i>Hyla japonica</i>		●	●	●				●	●	●	
	アカガエル科	タゴガエル	<i>Rana tagoi tagoi</i>	●	●	●	●		●			●	●	
		ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i>	●							●			
		ヤマアカガエル	<i>Rana ornativentris</i>	●	●		●		●			●		
		トノサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i>	●	●	●	●		●		●	●	●	
		ウシガエル	<i>Lithobates catesbeianus</i>		●	●	●		●		●	●		●
		ツチガエル	<i>Glandirana rugosa</i>		●		●					●		
	ヌマガエル科	ヌマガエル	<i>Fejervarya kawamurai</i>		●	●	●			●	●	●		●
	アオガエル科	シュレーゲルアオガエル	<i>Zhangixalus schlegelii</i>	●	●	●			●	●	●	●	●	
モリアオガエル		<i>Zhangixalus arboreus</i>			●			●						
カメ目	イシガメ科	ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i>	●			●			●	●			
		クサガメ	<i>Mauremys reevesii</i>		●		●			●				●
	ヌマガメ科	ミシシippアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>	●	●	●	●			●	●			●
有鱗目	ヤモリ科	ニホンヤモリ	<i>Gekko japonicus</i>			●	●				●			●
	トカゲ科	ニホントカゲ	<i>Plestiodon japonicus</i>	●	●	●	●		●	●	●	●		●
	カナヘビ科	ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i>	●	●	●	●			●	●	●		●
	ナミヘビ科	シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i>		●	●	●		●	●		●	●	●
		アオダイショウ	<i>Elaphe climacophora</i>		●									●
		ヒバカリ	<i>Hebius vibakari vibakari</i>			●					●		●	
		ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus</i>		●	●	●		●			●	●	
	クサリヘビ科	ニホンマムシ	<i>Gloydus blomhoffii</i>		●	●					●		●	
4目	13科	23種	—	9種	18種	16種	16種	0種	9種	8種	13種	13種	10種	9種

注) 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査 令和3年度生物リスト」(国土交通省、2021)に従った。

表 15 各環境で確認された両生・爬虫類

環境区分	両生・爬虫類
森林	ニホンヒキガエル、タゴガエル、ヤマアカガエル、モリアオガエル、ニホントカゲ、ヒバカリ、ニホンマムシ
草地・農地	ニホンアマガエル、ニホンアカガエル、トノサマガエル、ヌマガエル、シュレーゲルアオガエル、ニホンカナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ
水辺	アカハライモリ、ツチガエル、ヌマガエル、ニホンイシガメ、クサガメ、ウシガエル(外来種)、ミシシippアカミミガメ(外来種)
市街地	ニホンヤモリ

注) 青字は繁殖場所が水田、ため池、河川などの水域を利用する種

■各エリアにおける両生類・哺乳類の確認状況

・奈良公園

現地調査により、両生類 6 種、爬虫類 3 種の合計 9 種が確認された。

確認された両生類の多くは、樹林内の小河川や浅い湿地などの水域に生息していた。モリアオガエルは飛火野の湿地で卵塊が 16 個、成体 1 個体、若宮神社のため池で卵塊が 5 個確認された。すべての卵塊は水際に生育する樹木に産み付けられていた。モリアオガエルの成体は森林の樹上で生息し、繁殖期に樹林に囲まれた池や湿地に移動し産卵する。奈良県では絶滅寸前種となっているが、調査で卵塊が複数確認されたことから、奈良公園にはある程度生息していると考えられる。しかし、産卵場所の一つである、若宮神社の池では外来種で捕食者のウシガエルが 50 個体以上確認されており、モリアオガエルの繁殖への影響が懸念される。他に成体が森林に生息し、繁殖期に水域に移動する両生類としてヤマアカガエル、タゴガエル、シュレーゲルアオガエルが確認された。これらのカエルは森林と水域の連続性が必要である。「奈良公園」エリアは、春日山原始林とも連続する低山帯下部の森林環境を有しており、森林の中に湿地や小河川が点在している。このような環境を反映した両生類相といえる。

爬虫類は全調査エリアの中で最も種数が少なく、ニホントカゲ、シマヘビ、ヤマカガシが確認された。いずれも神社の石垣付近で確認され、石垣の隙間を生息環境として利用していた。シマヘビは飛火野の湿地でモリアオガエルの成体を捕食していた。

外来種では、ウシガエルの成体や幼生が若宮神社の池で 50 個体以上確認された。ウシガエルは外来生物法により、特定外来生物に指定されている。大型のカエルで口に入る大きさの動物を食べ、確認された在来種のカエル類や昆虫類を捕食している可能性がある。



モリアオガエルの卵塊



モリアオガエルを捕食するシマヘビ



モリアオガエルの繁殖場所（飛火野の湿地）



モリアオガエルの繁殖場所（若宮神社の池）



タゴガエル



トノサマガエル



ヤマカガシ



若宮神社の池のウシガエル

・佐紀

現地調査により、両生類2種、爬虫類6種の合計8種が確認された。

両生類は調査エリアの中で「西ノ京」エリアとともに種数が最も少なかった。両生類はヌマガエルとシュレーゲルアオガエルのみ確認された。ヌマガエルは水田を中心に水路や放棄水田、シュレーゲルアオガエルは古墳の堀や放棄水田、水上池の湿地で確認された。両種とも鳴き声や幼体が水田地帯や古墳周辺で確認され、これらを繁殖場所として利用していると考えられる。シュレーゲルアオガエルの非繁殖期の生息場所は森林の樹上であり、「佐紀」エリアでは古墳の樹林や水上池北側のヤナギ林などを生息場所としていると考えられる。水上池では、両生類はほぼ確認されなかった。水上池の大部分は岸際がコンクリート護岸で、植生や浅い湿地の環境が少なく、両生類の生息環境としては適していないと考えられる。

爬虫類はニホンイシガメ、クサガメ、ミシシippアカミミガメ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、シマヘビが確認された。カメ類は水上池の岸際や構造物で休息する姿が多く確認された。水上池で目撃されたカメ類の個体数の内訳は、ニホンイシガメ1個体、クサガメ2個体、ミシシippアカミミガメ60個体であり、ミシシippアカミミガメが優占していた。また、古墳の法面草地ではミシシippアカミミガメの可能性のある産卵跡が確認された。ニホントカゲは調査エリア北側の雑木林近く、ニホンカナヘビ、シマヘビは乾燥した草地で確認された。

ミシシippアカミミガメは生態系被害防止外来種リストにより、緊急対策外来種に指定されている。雑食性で在来水草や水生昆虫類などへの影響が懸念される。



ヌマガエル



ヌマガエルが確認された放棄水田



シュレーゲルアオガエルの生息場所



水上池のニホンイシガメ



水上池のクサガメ



ミシシippアカミミガメの可能性のある産卵跡

・ 矢田丘陵

現地調査により、両生類は6種、爬虫類は7種確認された。

両生類はカエル類が水田地帯と森林を中心に確認された。シュレーゲルアオガエルは春季に水田地帯を中心に58個体が確認された。水田地帯を繁殖場所として利用するために、周辺の森林から移動してきたと考えられる。ヌマガエルは春～秋にかけて水田で確認された。ヌマガエルは年間を通じて水田地帯で生息している。ニホンアカガエルは早春季に森林の小さな湿地や人工的なビオトープ池で幼生が確認された。ニホンアマガエル、トノサマガエルは落葉樹林内で成体の鳴き声や姿が確認された。

爬虫類は「西ノ京」エリアとともに最も多くの種数が確認された。

ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、ヒバカリ、ニホンマムシは落葉広葉樹林内の林床で、ニホンヤモリは落葉広葉樹林内の人工構造物で確認された。ニホンイシガメは自然公園内の池で確認された。落葉広葉樹林が広がっており、周辺の草地や農地、池などが連続的に混在していることが爬虫類の種数が多い要因であると考えられる。

外来種はミシシippアカミミガメやウシガエルが池で確認された。ミシシippアカミミガメは個体数が多く、春～秋にかけて自然公園内の池で90個体が確認された。

全調査エリアの中で最も交通事故死（ロードキル）した両生・爬虫類が確認された（図4）。特に北側の雑木林内のアスファルト道路に多く、シュレーゲルアオガエル、アマガエル、ヒバカリ、ニホンマムシ等が交通事故死していた。雑木林の中や水田の横を通り抜けるために、道路の横断が多くなると考えられる。注意喚起の看板やボックスカルバートの設置などが事故回避に効果的と考えられる。

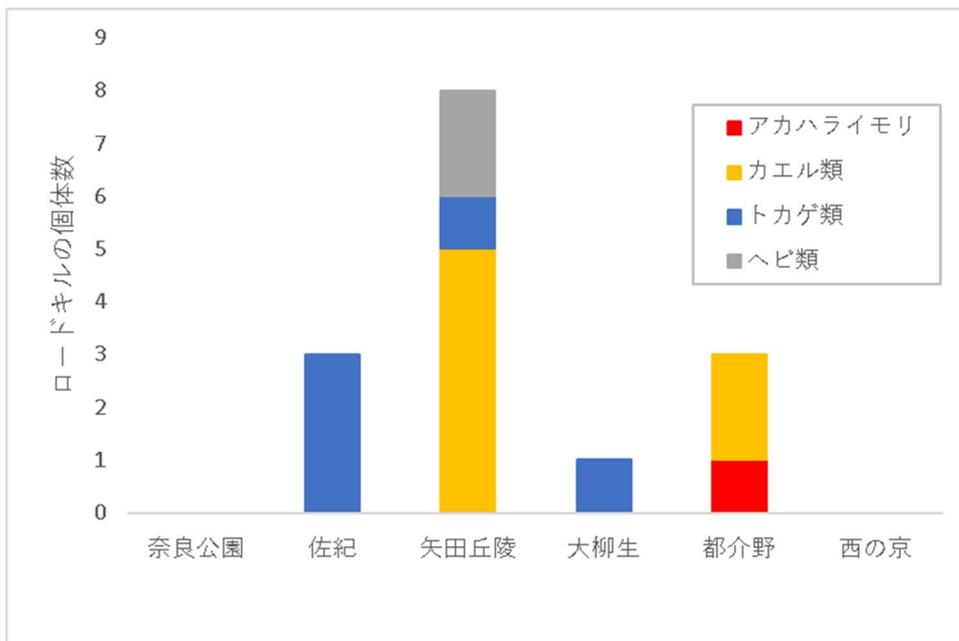


図4 各調査エリアの交通事故死した両生・爬虫類の個体数

※調査ルートの上で自動車等に轢かれていた個体の合計交代数

※奈良公園は調査ルート上に自動車が走る道はない



水田で繁殖するシュレーゲルアオガエル



年間を通して水田で見られるヌマガエル



ニホンアカガエルの幼生



自然公園内のため池のミシシippアカミミガメ



交通事故死したヒバカリ



交通事故死したニホントカゲ

・大柳生

現地調査により、両生類 9 種、爬虫類 4 種、合計 13 種が確認された。

両生類の確認種数は全調査エリアの中で最も多かった。確認された両生類の多くは、青少年野外活動センターのビオトープや集落の放棄水田に生息していた。アカハライモリ、ヤマアカガエル、トノサマガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエルはビオトープで卵塊や幼生が確認された。アカハライモリ以外の種の卵塊や幼生は他の場所での確認が少ないことから、ビオトープは「大柳生」エリアの両生類にとって重要な繁殖場所となっていると考えられる。夏季にはシュレーゲルアオガエルの上陸した幼体がスギ植林地などの樹林内で多く確認された。ビオトープや水田で繁殖した個体が周辺の森林へ移動分散していると考えられる。アカハライモリは休耕田の素掘り水路でも繁殖が確認された。休耕田の水路は地元住民が草刈りや水路掘りなどの維持管理を続けている水路で、幅 0.5m、長さ 15m ほどであった。小面積であるが、アカハライモリの幼生は多数確認され、良い繁殖場所になっていた。

爬虫類はニホンカナヘビ、ニホントカゲは草地や森林、シマヘビは草地や集落、ヤマカガシは竹林で確認された。森林から集落周辺で生息していた。

ニホントカゲや上陸した直後のアカハライモリは、竹林内に放置された畳の下で多く確認された。森林内の倒木や石の下はこれらの種の生息場所になっていると推測された。

外来種はウシガエルが貯水池で確認された。10 年前の調査では外来種は確認されていない。分布を拡大している可能性があり、注意が必要である。



両生類の繁殖場所のビオトープ



アカハライモリの繁殖場所の放棄水田の水路



トノサマガエル



トノサマガエルの幼生 (ビオトープ)



アカハライモリの幼生 (放棄水田)



シュレーゲルアオガエルの卵のう (ビオトープ)



ニホントカゲ



ニホントカゲ等が確認された畳の下

・都介野

現地調査により、両生類 6 種、爬虫類 4 種が確認された。

確認された両生類の多くは水田と森林で確認された。春季の夜間では水田や放棄水田では、シュレーゲルアオガエルは 169 個体、ニホンアマガエル 148 個体の鳴き声が聞かれ、トノサマガエルの成体も確認された。これらの種は水田や放棄水田を繁殖場所として利用していた。アカハライモリは 2 個体の確認で、水田や水路での調査では確認されず、生息個体数は少ないと考えられる。森林の林床ではトノサマガエル、ニホンヒキガエルの成体を確認された。森林内の河川ではタゴガエルの成体と幼体を確認され、周辺の伏流水で繁殖していると考えられる。

確認された爬虫類は畑地と森林で確認された。シマヘビは畑地の石垣で成体と抜け殻が確認され、石垣の隙間を生息場所として利用していた。ヤマカガシは水田と森林、ヒバカリとニホンマムシは森林の林床で確認された。いずれも個体数は少なかった。

外来種は確認されなかった。



水田で鳴くシュレーゲルアオガエルのオス



水田内のトノサマガエル



森林の小川で確認されたタゴガエル



森林の林床で確認されたニホンヒキガエル



水路で確認されたアカハライモリ



アカハライモリの腹面



石垣内のシマヘビ



シマヘビ、ヤマカガシが生息している石垣



森林の林床で確認されたヒバカリ



森林の林床で確認されたマムシ

・西ノ京

現地調査により、両生類2種、爬虫類7種、合計9種が確認された。

両生類は全調査エリアの中で最も種数が少なく、ヌマガエルとウシガエルが確認された。ヌマガエルは夏季に住宅に囲まれた水田や放棄水田で幼生～成体が108個体確認された。外来種のウシガエルが秋篠川で1個体、薬師寺に隣接するため池で3個体が確認された。市街地のため人工構造物が多く、農地の水路、池や河川の護岸はコンクリート化されている。緑地は乾燥傾向にあり、水域と緑地の連続性が分断されているために、両生類の種の多様性は低いと考えられる。

爬虫類は全調査エリアの中で「矢田丘陵」エリアとともに、最も種数が多く確認された。クサガメ、ミシシippアカミミガメが秋篠川で確認された。ニホンヤモリは神社の巨木で確認された。秋篠川沿いの河川堤防に生育する草地でトカゲ類、ヘビ類が確認された。

外来種は、ウシガエルが池、ミシシippアカミミガメが秋篠川、薬師寺に隣接する池で確認された。ミシシippアカミミガメが秋篠川支流の5m程の堰堤を乗り越えている姿が確認された。



ニホンヤモリ



アオダイショウ



秋篠川のミシシippアカミミガメ



堰堤を越えるミシシippアカミミガメ

■前回調査結果との比較

10年前に実施した前回調査の結果と種数を比較した。「奈良市環境基本計画（改訂版）」（奈良市、2012）における「自然環境の参考となる指標」では、両生・爬虫類の指標は採用されていない。

また、前回のみ調査を実施した「登美ヶ丘」エリアおよび今回のみ調査を実施した「西ノ京」エリアについては比較からは除外し、「奈良公園」「佐紀」「矢田丘陵」「大柳生」「都介野」の5エリアのデータを対象とした。

各調査エリアの両生類の在来種と外来種の種数および帰化率（確認された全ての種数のうち外来種の種数が占める割合）を表16に、爬虫類の在来種と外来種の種数および帰化率（確認された全ての種数のうち外来種の種数が占める割合）を表17に示した。

表 16 両生類の在来種、外来種の種数と帰化率

	合計		在来種		外来種		帰化率	
	2010-2011年	2020-2021年	2010-2011年	2020-2021年	2010-2011年	2020-2021年	2010-2011年	2020-2021年
奈良公園	8	6	7	5	1	1	12.5%	16.7%
佐紀	2	2	2	2			0.0%	0.0%
矢田丘陵	7	6	6	5	1	1	14.3%	16.7%
大柳生	5	9	5	8		1	0.0%	11.1%
都介野	8	6	8	6			0.0%	0.0%

表 17 爬虫類の在来種、外来種の種数と帰化率

	合計		在来種		外来種		帰化率	
	2010-2011年	2020-2021年	2010-2011年	2020-2021年	2010-2011年	2020-2021年	2010-2011年	2020-2021年
奈良公園	3	3	3	3			0.0%	0.0%
佐紀	6	6	5	5	1	1	16.7%	16.7%
矢田丘陵	6	7	5	6	1	1	16.7%	14.3%
大柳生	5	4	5	4			0.0%	0.0%
都介野	4	4	4	4			0.0%	0.0%

・両生・爬虫類の在来種の種数

調査で確認された両生・爬虫類の在来種の種数の比較を図5に示した。今回調査では、5エリアで4季合計20種の在来種の両生・爬虫類が確認された。前回調査では、5エリアで合計22種の在来種の両生・爬虫類が確認されていることから、今回の調査結果である20種と比較すると前回よりも2種減少したことになる。種数の内訳をみると、今回のみ確認された両生・爬虫類は0種、前回のみ確認された両生・爬虫類は2種であった（表18）。前回のみ確認された両生・爬虫類はヤマトサンショウウオ、アオダイショウであった。ヤマトサンショウウオは「奈良公園」エリアで卵塊が1個確認されている。1994年に奈良教育大学が出版した「奈良公園の自然」では多数の卵塊が確認されている。過去に奈良公園内のヤマトサンショウウオが確認されている水域に

において 2017 年に行われた調査でも確認されなかったことから、ヤマトサンショウウオの生息状況は奈良公園地区ではほぼ絶滅、春日山地区でも極めて危機的状況にあるとされている（澤畠ら、2017）。今回調査した「奈良公園」エリアの止水環境はヤマトサンショウウオの捕食者と考えられるアライグマ、ウシガエル、アメリカザリガニ、コイなどが多数確認され、繁殖は極めて厳しいと考えられた。アオダイショウは前回調査の「都介野」エリアで確認されたが、今回調査の比較するエリアでは確認されなかった。一方で、本調査では他地点（「西ノ京」「白砂川」）でアオダイショウが確認されていることから、今回の限られた調査で確認できなかった可能性がある。農村部を中心に生息適地はあることから、個体数は少ないが生息している可能性は高い。

エリアごとの種数では、「奈良公園」エリアと「都介野」エリアで 2 種減少している。「佐紀」エリア、「矢田丘陵」エリアは種数に変化は無く、「大柳生」は 2 種増加している。この 10 年間に各エリアの大きな環境変化は確認できないため、前回調査と比較しても大きな変化は無いと考えられる。

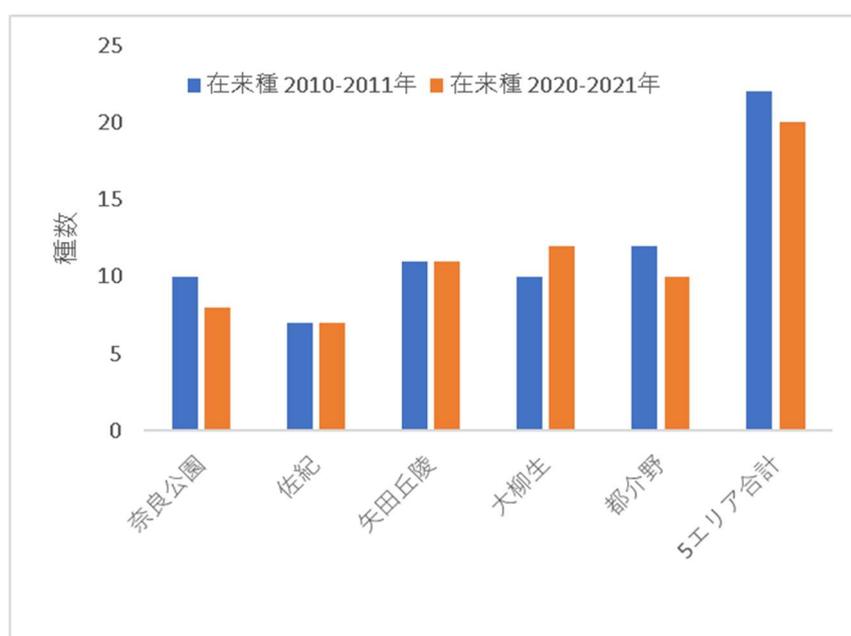


図 5 両生・爬虫類の在来種の種数の比較

表 18 今回および前回調査でのみ確認された両生・爬虫類の在来種

2020-2021 年調査でのみ確認された両生・爬虫類(0 種)	—
2010-2011 年調査でのみ確認された両生・爬虫類(2 種)	ヤマトサンショウウオ、アオダイショウ

・外来種の種数と分布状況

調査で確認された両生・爬虫類の外来種の種数を図 6 に示した。今回調査では外来種はウシガエルとミシシippアカミミガメの 2 種確認された。前回調査で確認された外来種と同様であった。奈良盆地は外来種が広範囲に分布し、ため池や河川では高密度に生息している事が確認された。前回調査では「大柳生」エリアと「都介野」エリアでは外来種の確認は無かったが、今回調査では「大柳生」エリアでウシガエルが新たに確認された。「大柳生」エリアや「都介野」エリアは笠置山地で奈良盆地とは隔たりがあるため、水域を利用して移動するウシガエルやミシシippアカミミガメは侵入しにくかった可能性がある。これまで外来種が侵入していなかった地域でモニタリング調査を実施し、外来種の早期発見、早期駆除が地域の生態系を保全することに繋がる。また、奈良盆地でも新たな外来種が侵入する可能性があるため、モニタリング調査を実施することが望ましい。

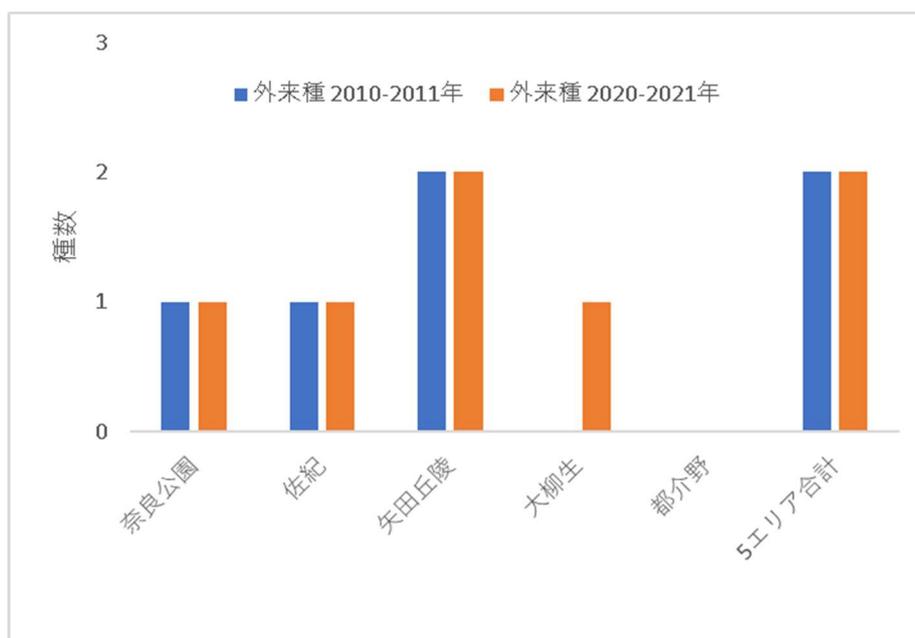


図 6 両生・爬虫類の外来種の種数の比較

■両生・爬虫類の重要種の確認状況

今回の調査で確認された全 22 種の両生・爬虫類のうち奈良県 RDB では 14 種、環境省 RL では 3 種、合計 15 種が選定されている。両生・爬虫類の重要種を表 19 に示す。

表 19 両生・爬虫類の重要種

No.	綱	種	確認時期					確認エリア						重要種選定基準	
			早春 季	春季	夏季	秋季	冬季	奈良公園	佐紀	矢田丘陵	大柳生	都介野	西ノ京	環境省RL (2020)	奈良県RDB (2020)
1	両生綱	アカハライモリ		●	●	●					●	●		NT	希少
2		ニホンヒキガエル		●								●			危機
3		ニホンアカガエル	●						●						危機
4		ヤマアカガエル	●	●		●		●		●					希少
5		トノサマガエル	●	●	●	●		●	●	●	●			NT	
6		ツチガエル		●		●				●					希少
7		シュレーゲルアオガエル	●	●	●			●	●	●	●	●			希少
8		モリアオガエル			●			●							寸前
9	爬虫綱	ニホンイシガメ	●			●		●	●					NT	危機
10		クサガメ		●		●		●				●			情報
11		ニホンヤモリ			●	●			●			●			注目
12		アオダイショウ		●								●			希少
13		ヒバカリ			●				●		●				希少
14		ヤマカガシ		●	●	●		●		●	●				希少
15		ニホンマムシ		●	●				●		●				希少
合計	2綱	15種	5種	10種	8種	8種	0種	5種	3種	7種	6種	7種	3種	3種	14種

注)分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査 令和3年度生物リスト」(国土交通省、2021)に従った。

注)重要種の選定基準は、以下のとおり。

環境省 RL: 環境省レッドリスト 2020(環境省、2020年3月27日公表)

EX: 絶滅、EW: 野生絶滅、CR+EN: 絶滅危惧 I 類、CR: 絶滅危惧 I A 類、EN: 絶滅危惧 I B 類、VU: 絶滅危惧 II 類、NT: 準絶滅危惧、DD: 情報不足、LP: 絶滅のおそれのある地域個体群

奈良県 RDB: 奈良県レッドデータブック 2016 改訂版(奈良県、2016年)

絶滅: 絶滅種、野生: 野生絶滅種、寸前: 絶滅寸前種、危機: 絶滅危惧種、希少: 希少種、情報: 情報不足種、注目: 注目種



アカハライモリ



ニホンヒキガエル



ニホンアカガエル



トノサマガエル



ツチガエル



シュレーゲルアオガエル



モリアオガエル



ニホンイシガメ



ヒバカリ



アオダイショウ



ヤマカガシ



ニホンマムシ

■両生・爬虫類の外来種の確認状況

確認された両生・爬虫類のうち、外来種はウシガエル、ミシシippアカミミガメの2種であった。

・ウシガエル

「矢田丘陵」「大柳生」「都介野」エリアで確認された。前回調査では「矢田丘陵」「都介野」エリアで確認されており、今回「大柳生」エリアで新たに確認され、確認エリア数が1エリア増加したことになる。確認された調査エリアはいずれも広大な森林に接しており、冬季を除いて確認されていることから繁殖している可能性が高い。

・ミシシippアカミミガメ

「奈良公園」「佐紀」「矢田丘陵」「西ノ京」エリアにおいて確認された。いずれも公園緑地や農地、市街地で小群が確認されたが各エリアでの確認は数個体程度であり個体数密度は低かった。前回調査では「都介野」エリアでのみ数個体が確認されており、確認エリア数としては3エリア増加したことになる。



ウシガエル（外来種）



ミシシippアカミミガメ（外来種）